秋月禅学と私（1）

―「初めに大悲ありき」―

竹村　牧男

今年（平成14年）は、先師・秋月龍珉（りゅうみん）がこの世を去って、満3年目の年であった。しかし今なお、龍珉の慈眼と思想とは、私の心の中に生きつづけている。龍珉は禅者として、禅の奥義を究めるとともに、仏教の本質を掘り下げ、西田の宗教哲学を論じ、仏教とキリスト教の対話・宗教間対話に情熱を傾けた。その龍珉のめざしたところを、私も少しでもめざしていきたいと切に思う。

龍珉は平成11年9月、満78歳になる直前に示寂（じじゃく）したのであったが、それはその5年前、スイス・ツーク市で開催された「仏教とキリスト教の対話のための国際集会」に出席中、脳梗塞により倒れたことに由来するものであった。その国際集会はほぼ1週間の日程であったが、中日には近郊への小旅行が組まれていた。その中日、午前中、参加者そろってチューリッヒ郊外のチベット仏教寺院に見学に出向いていたが、いつしか龍珉の御様子がおかしくなり、急きょ宿舎に帰り、結局、翌日、チューリッヒ大学病院に入院することになった。この入院に際しては、（株）東機貿社長・佐多保彦氏に大変お世話になったのであり、この場をお借りしてあらためて深謝申し上げたい。1週間ほどして日本に帰ることができたが、後遺症によりもはや昔日のようなめざましい活動はかなわず、そしてついに永遠のお別れとなってしまったのであった。

かのチベット仏教寺院において、休んでいたとき、ある青年が近づいてきて絵はがきのようなものを出し、何か一筆書いてくださいと龍珉に頼んだ。私は、一体、龍珉は何と書くのだろうと、多大の関心をもって見守っていたところ、ややあってのち記した言葉は、「初めに大悲ありき」であった。そのとき、私はあらためて、龍珉の禅の核心はそこにあるのだなあと思わずにはいられなかった。それは私にとっても、先師の最後の法語となったのであった。

龍珉には全15巻に及ぶ『秋月龍珉著作集』があるが、その第二巻の書名も、「初めに大悲ありき」である。その書の冒頭には、「『新約聖書』の『ヨハネ伝』の記者は言う、『初めにロゴスがあった。ロゴスは神とともにあり、ロゴスは神であった』と。初めに何があったのか？初めにあったものが、聖ヨハネの言うように、ロゴスなら、そのロゴスとはいったい何なのか？」と始めている。そしてこの問いに対して、龍珉は自ら答えて、「言（ロゴス）はすなわち愛（アガペー）であった。すなわち『初めに大悲（慈悲）があった』。神の自覚 ── 天地創造の根本は、他ならぬ神の愛であった。『表現愛』（＊1）であった。哲学と宗教とが真に一致する人間実存の『根源的場所』がここにある」と述べている。龍珉は少なくともこの間において、ロゴス即アガペーであるゆえんを明らかにしてはいない。しかし龍珉の体験と思索においては、そうであるほかなかったのであろう。

それにしてもなぜ龍珉は、このような魅力的な言葉を道（い）うことができたのであろうか。それは、龍珉の修してきた禅が、実にそういうものだったからなのであろう。たとえば龍珉が満21歳のとき、初めて参禅した寒松室・宮田東珉は、ある日の提唱に、「禅も大悲心というものがなかったら、禅も畢竟（ひっきょう）、一つの哲学に終ってしまう」と説くが、その言葉は龍珉の胸にいたくひびき、心に深く蔵されるのであった。

その後、武蔵野般若道場の般若窟・苧坂（おさか）光龍に参禅し、満37歳のとき印可を受けるが、その室内、つまり越渓（えっけい）・禾山（かざん）下の公案体系は、徹底して悲心を基調とするものであった。

それらに加えて、親しく指導を受けることとなる也風流庵・鈴木大拙の人と思想が、また悲心にあふれるものであった。実は前の著作集第二巻の第一章「初めに大悲ありき」には、「鈴木禅学の論理」という副題もついているのである。

大拙はもとより禅者であったが、50歳のころ、大谷大学に招かれて、真宗の生きた信仰にふれていく。そうした中で、禅と浄土に通底する宗教心を見出し、日本的霊性ということを言い出す。日本的霊性が知の方面に現れたのが禅であり、情の方面に現れたのが法然 ── 親鸞の浄土教であるというのである。その浄土教の核心は、絶対無縁の大悲に包まれて、この身このまま救われるということにあると指摘する。そのように禅者・大拙も、宗教の根底にある大悲の世界をしきりに語ったのであった。

そのような大拙をよくもの語る話を紹介してみたい。鈴木重信は、『鈴木大拙全集』の月報に、まさに「大悲の人」と題して、次のように記している。

── 先生の晩年、私は永い彷徨の末にカトリックに帰依した。そのことを報告したとき、先生は「それはよかったなあ」と非常に喜ばれた。「君はプロテスタントじゃったが、どうもプロテスタントの人は、頭で

竹村　牧男 / たけむら・まきお
1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍珉老師に参禅する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖珉。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一遍』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』など多数。

考え、理屈が多すぎる。それでは本当のことはわかるものではない。その点カトリックのほうがよっぽど禅に近い。第一、君、カトリックには聖母マリヤがあるからな。あれは悲母観世音じゃよ」と言われ、ひとしきりマリヤ礼賛について語られた。……　――

そういう大拙に師事した龍珉が、次第に宗教の核心は大悲の心にこそあると考えるにいたるのは、けっして不思議なことではないであろう。

ロゴスがアガペーであるということは、神の本質はアガペーであるということである。このことを、大拙の無二の心友・西田幾多郎は、宗教哲学的に究明しようとした。龍珉はその西田の宗教哲学も深く摂取している。

西田は、宗教の問題を哲学の終結の問題と考え、最晩年に「場所的論理と宗教的世界観」を書き上げる。そこでは、禅と真宗とキリスト教とを統一的に捉える立場が披瀝されているが、実は真宗の考え方がベースとなり、キリスト教の神も絶対愛の神であるべきことが説かれていく。たとえば、「単に超越的なる神は真の神ではない。神は愛の神でなければならない。キリスト教でも、神は愛から世界を創造したと考へられるが、それは絶対者の自己否定と云ふことであり、即ち神の愛と云ふことでなければならない。之に反し、我々の自己が絶対愛に包まれると云ふことから、真に我々の自己の心の底から当為(＊2)と云ふものが出て来るのである」とある。そして次の一節は、まさに日本的霊性のうちに捉えられた神の姿であろう。

――　之に反し、絶対者は何処までも我々の自己を包むものであるのである。何処までも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追ひ、之を包むものであるのである。即ち無限の慈悲であるのである ――

同じ禅でも、とりわけ悲心を強調する流れの中にあった龍珉は、西田の宗教哲学によって決定的に、「初めに大悲ありき」と思うに至ったのであった。おそらくそうであったと私は思うのである。

龍珉が病に倒れたスイスでの仏教とキリスト教の対話のための国際集会は、ヨーロッパで初めて開催されたものであったが、アメリカではすでに1980年以来、4年ごとに開催されている。龍珉は1987年、バークレーで開催されたその集会にも、1992年、ボストンで開催されたその集会にも参加している。60余の年齢のころから海外に出るようになり、以後国際的な宗教間対話の進展に精力を注いでやまなかった。もともと龍珉は青年時代、キリスト教の中に育ち、のち禅に入っていったのである。禅者として世に立ったあとでも、イエスは最高の禅者であると言ってはばからず、私はイエスの直弟子でありたいとも語るのだった。滝沢克己・八木誠一らキリスト教神学者と緻密な議論を展開し、仏教とキリスト教とが一つに結ばれるところを早くから究明しつづけた。宗教の和解、それこそが時代の課題であると見すえていたのである。

かのスイスでの国際集会では、「仏教とキリスト教の宗教としての共通の根拠 ―― 世界平和の礎を求めて」と題した特別講演を最終日に行うことになっていたが（これは予定の日時に代読された）、そこには次のような一節が含まれていた。

――　私はかつて、ドイツのザンクト・オッチリーエンのベネディクトの大修道院を訪ねたとき、「初めに大悲ありき」と言った。ヴォルフ院長はすかさず、「おおカルナー、そこであなたと私は一つになりました」と応じてくれた。仏教にいう「カルナー」は、キリスト教にいう「アガペー」である。私はここに「仏教とキリスト教の共通の根拠」があると信じる ――

「初めに大悲ありき」、それは龍珉にとってあらゆる宗教の根拠なのであり、そして自らの禅学の根底なのであった。

（＊1）哲学者・木村素衛が提唱した思想
（＊2）人間のなすべきこと、行うべきこと